

TAITO フューチャースクール検討委員会 先進校視察 報告

- 目 的 「令和の日本型学校教育」の構築に向けた課題に対する解決策や、これからの学校創りに求められるノウハウ等、今後の台東区立学校における学校教育及び教育環境の検討の参考とする。

第1 富山市立芝園小学校

- 1 視察日時 令和6年5月29日(水) 午後0時30分から午後5時00分まで
令和6年5月30日(木) 午前8時30分から正午まで
- 2 参加者 TAITO フューチャースクール検討委員会 委員長ほか 6名
東京学芸大学教授 高橋 純 先生 東京理科大学教授 垣野 義典 先生
台東区立上野小学校長 田中 康雄 先生 台東区立駒形中学校長 渡邊 和彦 先生
台東区教育委員会 教育改革担当課長 増嶋 広曜 統括指導主事 嶋山 繁善

3 報告事項

(1) 概 要

本校は、令和2年度より1人1台端末を活用した問題解決型学習の研究を進め、「問題解決を楽しみ、学び合う子どもの育成」に向けて児童の主体性のある授業を目指している。

また、平成20年4月に施設一体型の小中学校として開校した校舎は、文部科学省の新しい時代の学びを実現する学校施設整備・活用推進プラットフォームの「CO-SHA Platform」ポータルサイトに新たな学校づくりのアイデア集に掲載されている。

普通教室は、廊下側に間仕切りがなく、オープンスペースとつながる広々とした空間を採用しており、ランドセルロッカーやひょうたん型テーブル、丸テーブル、ホワイトボードなどの移動できる家具を配置し、児童が学習方法を主体的に選べる柔軟な教育環境を実現している。

研究授業では、児童が教室環境や1人1台端末を積極的に活用して学習に取り組んでいた。教員は、児童が学習しているそれぞれの場を回り、学習状況に応じた言葉掛けを行い、的確な指導・支援を行っており、教員の教科の専門性の高さがうかがわれた。

一方、授業における教員のICT機器の活用については、本区で効果的に活用している教員の様子と比較しても目新しさは見当たらなかった。



開放的なオープンスペース



間仕切りのない教室



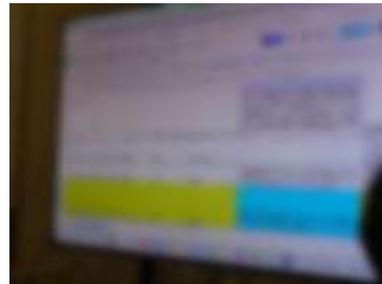
可動式のランドセルロッカー

その後の研究協議会では、市内の先生方も自身のクロームブックから研究協議会のチャットにアクセスし、参加している様子が見られた。チャット機能を活用することにより、リアルタイムに意見が共有されるので、協議の方向性に応じて司会者が的確に指名をして口頭でより詳細に意見を述べるができるなど、効率的な意見交換がなされていた。

校長としても、教員の研修を重視しており、児童と同じように教員も探究を進めることが大切であり、教員自身が見通しをもてることや成長を感じられることが教職に対する意欲を高めることにつながると考え、一人一研究授業を原則として、授業力を磨く研修の機会を設定しているとのことであった。



研究協議会の様子



スプレッドシートでの意見共有

(2) 研究授業の様子

- ① 大型モニタにスプレッドシートが表示され、児童の取組状況(誰と学ぶか、教員の支援が必要かなど)が色分けされて提示されていた。
- ② 児童は、思い思いの場所・道具・他者と学習を進めている様子が見られ自由度の高さがうかがわれた。
- ③ 児童が、自ら誰と学ぶかを選択していた。
- ④ 児童が、様々な場で学べるように雲形テーブルや丸テーブル、ホワイトボードなどがオープンスペース等に配置されていた。
- ⑤ 1単位時間集中して、探究活動を行っていた。
- ⑥ 振り返りの場面では、スプレッドシートの共同編集機能を活用して、他者参照をしながら授業の振り返りを行っていた。

(3) 研究協議会の様子

- ① 市内の先生方はクロームブックを持参して、チャット機能により協議の流れを把握するとともに意見を発信したりしていた。
- ② 授業者の心がざわつくような的確な指摘がなされていた。また、授業者もしっかりとその提案を受け止め、改善について真摯に考える様子が見られた。
- ③ 指摘があった点について、翌日の授業ですぐに改善の手立てを試していた。

第2 板橋区立板橋第十小学校

1 視察日時 令和6年7月5日(金) 午前10時00分から午前11時30分まで

2 参加者 TAITO フューチャースクール検討委員会 委員ほか 7名

台東区立上野小学校長 田中 康雄 先生 台東区立駒形中学校長 渡邊 和彦 先生
台東区教育委員会 事務局次長 前田 幹生 教育施設担当課長 森田 孝次
教育改革担当課長 増嶋 広曜 統括指導主事 壺山 繁善
教育改革係長 林 大輔

3 報告事項

(1) 概要

本校は、4つの柱である「地域と連携する」「主体的・協働的な学びを育てる」「変化に対応する工夫」「安全・安心をつくる」を施設計画のコンセプトとして新しく建て替えられ、令和2年9月に完成し、探究的な学習の充実を最重点教育活動として推進している。

学校を支える地域の活動拠点として、「地域連携兼 PTA 活動室」を1階の開放ゾーンに配置して、PTA や地域が学校の管理時間外にも利用できるようにしている。

普通教室は、廊下側が可動式の間仕切りとなっており、活動内容に応じて開閉することができる。各学年に「オープンスペース」があり、丸テーブルやローテーブル、つい立てなどの移動できる家具を配置し、児童が学習方法を主体的に選べる柔軟な教育環境を実現している。

図書室を学校の中心に配置している。内装や家具等にあたたかみのある日光産材を使用して、「だれもが利用しやすい図書室」としている。

職員室のレイアウト改革として、教職員の働き方の変化に対応できるフリーアドレス化を行った。また、職員室を2階の中央部に配置し、校庭全体を視認できるようにして安全確保を図っている。



可動式の間仕切り



オープンスペース



オープンスペースの収納棚



日光産材を使用した図書室



明るく開放的な廊下



フリーアドレスの職員室

(2) 授業の様子

- ① 児童が教室で学ぶかオープンスペースで学ぶかを選択して、学習を進めている様子が見られ自由度の高さが一定程度うかがわれた。
- ② 児童が、自ら誰と学ぶかを選択していた。
- ③ 児童が、様々な場で学べるように丸テーブル、ローテーブル、机、ホワイトボード、つい立てなどがオープンスペースに配置されていた。



オープンスペースの活用

(3) 職員室の活用状況

- ① 教職員の私物を個人ロッカーに収納して、デスクフリーにすることで、個人業務から打合せ、教材等の製作まで、机の組み合わせにより用途や人数に合わせてフレキシブルに使うことができる。
- ② 個人ロッカーに書類等の受け口があるため、配布物等をもれなく渡すことができる。
- ③ 学校事務機能が職員室内にあることで、教員と事務職員との情報共有をスムーズに行うことができる。



書類受けのある個人ロッカー

○ 考 察

【教職員の資質・能力の向上】

整備された環境を効果的に活用するための教職員の資質・能力を向上するために、研究校での実践や先進事例等を周知するとともに、アンラーンを促進して意識改革を推進することが必要である。その際、教職員がいつでもどこでも誰でも学べるように、授業動画や授業で活用したデータ等を共有する仕組みを構築する必要があると考える。

【学校DX化の推進】

Wi-Fi環境が整備されていることから、個々の学校内だけでなく区立学校全体においてクラウド上で全てのデータ処理を行えるようにする必要がある。また、分散型コミュニケーションを可能とするチャット機能や共同編集機能等を積極的に活用し、働き方改革を推進する必要がある。さらに、校務系ネットワークと学習系ネットワークを統合した次世代ネットワークの導入は必須であると考ええる。

【教育環境の整備】

一斉指導による学習、個別学習、グループ学習等を自由かつ柔軟に展開できるように、教室の廊下側の壁を開放する、又は開放できるようにするとともに、教室と接する場所にオープンスペースを配置する必要がある。また、1人1台端末と各種教材を同時に扱うことができる板面の大きな机を配備する必要があると考える。

職員室には、少人数での会議や製作等の作業を行うことのできるフリーデスクを配置する必要があると考える。なお、フリーアドレス化については慎重な検討が必要である。